黎明期の初代大川屋錠吉

松永瑠成

〈キーワード〉貸本屋・貸本問屋・出版・書籍流通・講談本

はじめに

近世前期の誕生から、貸本屋は教養と娯楽のための書籍を人々に提供し続けた。明治・大正と時代が変わっても、見料と引き換えに書籍を貸し出す従来の方法は踏襲されたが、その営業形態や蔵書内容は時代とともに、緩やかながらも確実に変容していった。

東京牛込の貸本屋池田屋清吉は、書籍を背負って町々を練り歩き、得意先を廻る旧来の営業を長らく続けたことで知られている。その明治一〇年代の蔵書は戯作や実録が大半で、近世の面影を未だに色濃く残している。[1] 明治二〇年ごろ勃興した所謂「新式貸本屋」は、書生を主な顧客とする居付きの貸本屋である。蔵書は明治以降に刊行された書籍を中心とするが、それでも東京の共益社や東京貸本社、大阪の橋本貸本店などは、近世の版本あるいはそれらをもとにした活字翻刻本を少なからず有していた。[2] 明治三〇年以降はどうであろうか。たとえば、北海道札幌市の独立社[3]や栃木県烏山町の越雲書店[4]、石川県金沢市の春田書店[5]などの蔵書には、版本もなければ活字翻刻本もない。明治も後半に差し掛かるころには、貸本屋は居付きとなり、蔵書にはもはや近世の面影がみられないのである。そこにあるのは、貸本屋の新しい姿であった。

新たに蔵書の中心となったのは、講談本や小説類である。特に前者は近世期の読本・滑稽本・人情本と同様、貸本向けに出版されていたといっても過言ではない書籍である。このような貸本向けの書籍を出版・蔵版し、それらを卸す問屋としての機能を有した書肆を貸本問屋という。貸本問屋は近世期からすでに存在しており、江戸の丁子屋平兵衛や大島屋伝右衛門などが知られている。[6] 彼らは明治になっても営業を続けるが、やがては新興の書肆にその地位を譲ることとなる。そうした新興書肆のなかでも、出版点数や活動面で抜きん出ていたのは、聚栄堂大川屋錠吉（後の大川屋書店）であった。

これまでも前田愛氏[7]や柴野京子氏[8]の研究のなかで大川屋は取り上げられているが、いずれもその実態を明らかにできているとは言い難い。新たに貸本屋の蔵書の中心となった講談本の出版と流通、ひ

いてはその受容への理解を深めるためにも、大川屋の実態解明は急務であろう。そこで、本稿では営業の基盤を築き上げた初代大川屋錠吉に着目する。そして、その黎明期の動向から、大川屋が貸本問屋として躍進できた要因を明らかにしていく。

一、貸本屋としての大川屋

大正一五年（一九二六）三月六日、初代大川屋錠吉（以下、大川屋）は脳溢血のため亡くなった。享年八一歳。同月一〇日の『読売新聞』一七五九九号には、次のような訃報が掲載された。

大川屋主人逝く

東京書店界屈指の老舗として重きをなしている浅草区三好町大川屋の主人大川錠吉氏は去六日脳溢血で逝去八日根岸西蔵寺で葬儀が行はれた享年八十一歳、誠に天寿を完うしたもの、出版界に於ける業績も前後五十年の久しきに亘り其間東京地本彫画営業組合の評議員東京出籍（ママ）出版営業者組合の協議員、東京書籍商組合の評議員等に重任し斯界の巨頭と仰がれ巨万の資産を興した弘化三年六月武州入間郡横沼村の生れで十二歳初て江戸に出た時には書林浅倉屋久兵衛方の貸本小僧をしていたが勤続十年独立して深川に小さな貸本屋を開業したのが出世の最初で正に立志伝中の人物であつた

ここに記される華々しい経歴は『東京書籍商組合史及組合員概歴』[9]から、「斯界の巨頭と仰がれ巨万の資産を興した」活躍ぶりについては橋本求著『日本出版販売史』[10]や『全国出版物卸商業協同組合三十年の歩み』[11]、また誠文堂新光社の小川菊松[12]や大東館の藤井誠治郎[13]、甥にあたる集文堂の大川義雄[14]ら書籍業界の者による回想などからそれぞれ窺い知ることができる。

『東京書籍商組合史及組合員概歴』（以下、『概歴』）は、この訃報だけでなく、前述の前田氏や柴野氏[15]に加えて事典類[16]も参照している基本的な資料である。まずは『概歴』をもとに大川屋の経歴を確認しておく。

大川屋　大川錠吉初代（弘化三年六月九日生）　東京市浅草区三好町七番地　創業　慶応四年八月二十三日

生国ハ武蔵入間郡横沼村ニシテ、幼ニシテ父ニ従ヒ江戸ニ出デ、十二歳ニシテ書店浅倉屋久兵衛ノ店員トナリ、貸本部ニ勤続スルコト十年、慶応四年八月独立シテ深川西町ニ貸本業ヲ営ム。明治二年現在地ニ移転シ、同十八年ニ至リ貸本業ヲ廃シ書籍出版及取次販売ヲ開始ス。

明治二十五年以降三十一年迄東京地本彫画営業組合ノ評議員ニ当選シ、翌三十二年ヨリ今日迄同頭取ニ就任ス。明治二十七年及三十四年ニ東京書籍出版営業者組合ノ協議員ニ当選シ、同三十五年ヨリ今日迄東京書籍商業組合ノ評議員ニ当選ス。別ニ聚栄堂ノ商号ヲ併用ス。

父に連れられ江戸へ出てきた一二歳の大川屋は、書肆浅倉屋吉田

久兵衛のもとで奉公することとなった。浅倉屋は「浅倉屋書店」の名で現在も営業を続けている古本業界の老舗であり、その創業は貞享・元禄年間と伝えられている。大川屋が奉公していたのは、文積と号した八代目久兵衛の時代であった[17]。「貸本部ニ勤続スルコト十年」とあるように、浅倉屋は古本業のみならず貸本業、それに加えて出版業も行っている。貸本業については史料や記録が残っておらず不明な点が多いものの、木更津市立図書館蔵『真書太閤記』巻一九・二〇に押捺された貸本印（「浅草東仲浅倉」）から、その営業時期は浅草東仲町に店を構えていたころであったと考えられる。

浅倉屋貸本部での奉公後、独立し深川で貸本屋として歩み始めたのが、大川屋の書肆としての第一歩である。しかしながら、この深川時代は一年半ほどと短く、すぐに浅草三好町へと移っている。三好町移転後の大川屋は、往時の貸本屋を偲ぶ回想に名をみせるほど奮っていた。たとえば、坪内逍遙は「東京の貸本屋で、明治以後に名を知られてゐた主なのは、先づ、芝の長門屋、本所相生町の三又、牛込山伏町の池清、聖堂脇の伊勢屋、市ヶ谷の村田、浅草の大河（ママ）屋なぞ」[18]としている。また、俳人岡野知十も「本所の上総屋、浅草の大川屋、牛込の池田屋これなんかが先づ貸本屋として大きくやつてゐた店だらう」とその名をあげている[19]。

鈴木圭一氏は、所蔵する大川屋旧蔵本（『実生儀談』『元正間記』『花筐』『処女七種』『大岡仁政録』『花暦封じ文』）を紹介し、大川屋の「出版物および商法も貸本屋としての実地が活かされている」と指摘している[20]。鈴木氏所蔵本によれば、大川屋は自身の蔵書に「大川屋錠吉」もしくは「本錠」という貸本印を捺し、書籍の表紙に「浅草三好町／七番地／大川屋錠吉」と「亀印」あるいは「梅印」の字が印刷された票を貼付している。架蔵する為永春水作『天竺得瓶仙蛙奇録』巻之三にも、「本錠」印と「浅草三好町／七番地／大川屋錠吉」の票を確認できる（【図1】【図2】）。架蔵本に貼付された票には「鶴印」と印刷されている。旧蔵本からみる限り、大川屋は鶴亀や松竹梅といった分類のもと、読本・人情本・実録など近世期に出版もしくは筆写されたと思しい蔵書を整理している。この時期の大川屋は、牛込の池田屋清吉同様、昔ながらの背負いの貸本屋であったという[21]。蔵書内容だけでなく営業形態も旧来の貸本屋そのものである。現時点で大川屋旧蔵の講談本や小説類を確認できていないことから、おそらくこうした形の営業は貸本業を廃するまで変わらなかったものと思われる。

『概歴』によれば、大川屋は明治一八年（一八八五）に貸本屋か

【図1】大川屋の貸本印
（架蔵『天竺得瓶仙蛙奇録』巻3）

【図2】大川屋の票
（架蔵『天竺得瓶仙蛙奇録』巻3）

ら「書籍出版及販売取次」に転じたとあるが、この記述については検討を要する。『商人名家東京買物独案内』（上原東一郎、明治二三年〈一八九〇〉）で「稗史小説出版販売所」と紹介されていることから、確かに明治二三年の段階で大川屋は「書籍出版及販売取次」を始めていることがわかる。管見の限りでは、明治一八年ごろからボール表紙本を中心とする書籍の売捌書肆として、大川屋の名は散見するようになる。明治一〇年代後半から次第に出版・販売・取次へ参入していったのであろう。だが一方で、『日本紳士録』第一版（交詢社、明治二二年〈一八八九〉）や同第二版（交詢社、同二五年〈一八九二〉）、賀集三平編『東京諸営業員録』（賀集三平、同二七年〈一八九四〉）では、いずれも大川屋を「貸本屋」あるいは「貸本商」としている。また、論拠は不明ながら沓掛伊左吉氏も「大川貸本店は、貸本のかたわら軍記、実録物、通俗小説の出版を兼ねながら、明治二十四、五年頃には貸本業を切り捨てて、出版屋へ転業し、自家刊行書をもって貸本問屋として大をなした」と述べている。[22] 大川屋は書籍の出版・販売・取次をしながらも、しばらくの間は貸本業を続けていたのである。『日本紳士録』第三版（交詢社、明治二九年〈一八九六〉）で「書籍商」とされて以降は「貸本屋（貸本商）」と記されなくなるため、貸本業を廃したのはおそらく明治二八年ごろであったと考えられる。

本稿では取り上げないものの、明治二〇年代の大川屋は他書肆からの求版本を中心に出版活動を精力的に行っている。そうした活動の陰で、貸本業が継続されていた点は大川屋を考える上で重要である。前述したような貸本業界の変容の一部始終を、大川屋は出版・販売・取次としてだけでなく、一貸本屋として目の当たりにしていたのである。書籍を供給する側・供給される側という二つの視点を持ち合わせていた大川屋は、日々刻々と変わりゆく世の中で、どのような書籍に需要があるかをいち早く知り、それらを供給することができたと考えられる。これは貸本問屋として躍進を遂げられた一つの要因であろう。

二、明治一〇年代の出版物と周辺人物

貸本屋を営みながら、大川屋は出版業へと乗り出していく。その時期は『概歴』記載の明治一八年よりも早い。架蔵する著編者不詳の『敵討鶯塚美談』（大川錠吉、明治一九年〈一八八六〉）には、大川屋の蔵版目録が附載されている（【図3】）。本書は明治一九年二月廿五日出版御届、同年四月刻成の水野幾太郎版『今古実録敵討鶯墳美談』に、異なる序文を附し本文を全て組み直した求版本である。蔵版目録記載の『古代錦絵集古図譜』『女用文宝箱』『当世女用文』『早引塵劫記』『売買往来』『消息往来』『十五いろは』『紋帳雛形』『一寸用文』『手品種本』『富士見十三州輿地全図』『日本道中細見図』『日本府県全図』『日本之図』『東京図』『東京区分全図』は、多くが明治一〇年代に刊行され、大川屋が早い段階で携わったと思われる出版物である。

この蔵版目録や筆者の調査により、現時点で確認できた明治一〇年代の出版物は次のとおりである。

【図３】大川屋の蔵版目録
（架蔵『敵討鶯塚美談』）

明治一二年（一八七九）

萩原乙彦著『新門辰五郎游侠譚』初編

〈出版人〉武田伝右衛門　※大川屋錠吉との相版

萩原乙彦著『新門辰五郎游侠譚』二編

〈出版人〉武田伝右衛門　※大川屋錠吉との相版

井沢保治編『対山画譜』

〈出版人〉大川錠吉〈発売人〉瀬山直治郎

明治一三年（一八八〇）

井沢保治編『新訂漢画指南』初集

〈出版人〉大川錠吉〈発売人〉瀬山直次郎

井沢保治編『新訂漢画指南』二集

〈出版人〉大川錠吉〈発売人〉瀬山直次郎

矢野晋六編『靄崖画譜』

〈出版人〉大川錠吉〈出版兼発売人〉瀬山直次郎

矢野晋六編『晩成山房画譜』

〈出版人〉大川錠吉〈出版兼発売人〉瀬山直次郎

松村春輔著『春風日記』初編

〈出版人〉武田伝右衛門・大川錠吉

〈発売書肆〉高梨弥三郎

明治一四年（一八八一）

矢野晋六編『明清名家巾箱画譜』

〈刊行者〉大川錠吉〈刊行兼発鬻者〉瀬山直次郎

岡田霞船（良策）撰『孝貞節烈近世名婦伝』初輯

〈出版人〉大川錠吉〈発売人〉高梨弥三郎

岡田良策編『明治文雅都鄙人名録』

〈出版人〉大川錠吉〈売捌〉高梨弥三郎ほか七六書肆

井沢保治編『新訂漢画指南』三集

〈刊行者〉大川錠吉〈刊行兼発鬻〉瀬山直次郎

元岡維則著『大岡政談村井長庵調合机』初編

〈出版人〉大川錠吉〈発売人〉武田伝右衛門・高梨弥三郎

元岡維則著『大岡政談村井長庵調合机』二編

〈出版人〉大川錠吉〈発売人〉武田伝右衛門・高梨弥三郎

元岡維則著『大岡政談村井長庵調合机』三編

〈出版人〉大川錠吉〈発売人〉武田伝右衛門・高梨弥三郎

松村春輔著『春風日記』二編

〈出版人〉武田伝右衛門・大川錠吉〈発売人〉高梨弥三郎

松村春輔著『春風日記』三編

〈出版人〉武田伝右衛門・大川錠吉

岡田良策編『近世名婦百人撰』

〈出版人〉大川錠吉〈売捌〉高梨弥三郎ほか七書肆

明治一五年（一八八二）

松村春輔著『春風日記』四編

〈出版人〉武田伝右衛門・大川錠吉〈発売人〉高梨弥三郎

松村春輔著『春風日記』五編

〈出版人〉武田伝右衛門・大川錠吉〈発売人〉高梨弥三郎

松村春輔著『春風日記』六編

〈出版人〉武田伝右衛門・大川錠吉〈発売人〉高梨弥三郎

岡田霞船（良策）編『孝貞節烈近世名婦伝』二輯

〈出版人〉大川錠吉〈発売人〉武田伝右衛門・高梨弥三郎

元岡維則著『大岡政談村井長庵調合机』四編

〈出版人〉大川錠吉〈発売書肆〉武田伝右衛門・高梨弥三郎

元岡維則著『大岡政談村井長庵調合机』五編

〈出版人〉大川錠吉〈発売書肆〉武田伝右衛門・高梨弥三郎

明治一六年（一八八三）

元岡維則著『大岡政談村井長庵調合机』六編

〈出版人〉大川錠吉

〈売捌〉武田伝右衛門・高梨弥三郎ほか五書肆

松亭金水著『忠勇阿佐倉日記』初～三編　※求版本

〈書肆〉大川錠吉

〈売捌〉武田伝右衛門・高梨弥三郎ほか五書肆

梅亭金鶯著『七偏人』初～五編　※求版本

〈書肆〉大川錠吉

小神野孫叟筆『百工美術画譜』初編

〈出版人〉大川錠吉

明治一七年（一八八四）

『大日本府県名所独案内』

〈編輯兼出版人〉大川錠吉

『名所絵入東京区分全図　附四日めくり独案内』

〈編輯兼出版人〉大川錠吉

『大日本全図』

〈編輯兼出版人〉大川錠吉

明治一八年（一八八五）

杉本伊助編『八門九星初学入門』

〈出版人〉大川錠吉

〈売捌〉瀬山直次郎・武田伝衛門ほか四七書肆

明治一九年（一八八六）

仁科静太郎編『英語入十五伊呂波』

〈出版人〉大川錠吉

大川新吉編『花鳥画譜』

〈出版人〉大川錠吉

岡田良策編『唐草紋帳雛形』

〈出版者〉大川錠吉
福城駒太郎編『新選明治玉篇』 ※求版本
〈出版人〉大川錠吉
栗原吉五郎編『新選端唄大全』
〈出版人〉大川錠吉

単独ではないにせよ、明治一二年からすでに大川屋は出版に携わっていることがわかる。明治一〇年代の出版物には相版がよくみられるが、後半になるにつれて求版と大川屋単独のものも現れるようになる。また、後半には地図類の出版が目立つが、これらもおそらく求版だと考えられる。出版に関わる人物に注目してみると、武田伝右衛門・瀬山直次（治）郎・高梨弥三郎らの名が頻出している。次にこれらの人物を取り上げるなかで、明治一〇年代における大川屋の動向を探ってみたい。

まずは高梨弥三郎についてみていく。先の一覧で高梨弥三郎の名が最初に見えるのは、大川屋が武田伝右衛門との相版で出版した松村春輔著『春風日記』初編の発売書肆としてである。所在地は浅草区新福井町。前田健次郎編『郵便葉書一寸用文』（高梨弥三郎、明治一二年〈一八七九〉）の見返しに、「明十堂」という堂号を確認できることから、その創業は明治一〇年（一八七七）だと思われる。なお、後にこの堂号は「十」を「輯」に改めた「明輯堂」となっている。明治一四年（一八八一）には新たに設立された東京書林組合に加盟していることを確認できる。[23]

高梨弥三郎の早期の出版物は、明治一一年（一八七八）刊の『洋算独稽古』である。その後、明治二〇年ごろまで出版を続けているが、その数はそれほど多くない。明治二六年（一八九三）刊の戸川耕城著『万民必携安全儲蓄法』は、発行所が「高梨東神堂」、発行者が「高梨弥三郎」だが、所在地はいずれも「神戸市下山手通七丁目二百八十六番地」となっている。この神戸の高梨弥三郎が同一人物であるとするならば、業界内で「神戸落ち」と称されているものの早い例であるかもしれない。[24] 仮にここでは両者を同一人物とする。その後、代がかわった後も神戸で営業を続けていたようだが、大正一四年（一九二五）には閉店している。[25]

大川屋は明治一四年（一八八一）に岡田良策編『明治文雅都鄙人名録』を刊行する。その売捌書肆一覧には七七もの書肆が列挙されているが、末尾に名のみえるのは高梨弥三郎である。同年に出版された岡田良策編『近世名婦百人撰』の売捌には山中市兵衛・水野慶次郎・石川治兵衛・山口藤兵衛・山中孝之助・山中喜太郎・稲田佐兵衛など当時の東京における有力書肆が名を連ねているが、こちらも末尾は高梨弥三郎となっている。大川屋は明治一四年の段階では東京書林組合・東京地本錦絵営業者組合のいずれにも加盟していない。そのため、当初流通等は高梨弥三郎になんらかの形で頼っていた可能性が考えられる。ただ明治一五年（一八八二）一月一八日の『読売新聞』二〇九四号に掲載された『近世名婦百人撰』の広告に「但遠国より御注文ハ定価の金御届次第郵送致候事」、また同年三月三日の同紙二一三一号掲載『明治文雅都鄙人名録』の広告に「但本編出来の

上御求めの君ハ定価金三十五銭御届次第郵税持にて御逓送申上候也」とあるように、大川屋は郵便を使って遠国の顧客と繋がっていた。必ずしも高梨弥三郎やほかの有力書肆に頼らない流通網も保持していたようであるが詳細はわかっていない。

さて、大川屋は高梨弥三郎が刊行した書籍の蔵版などを受け継いでいる。たとえば、武田伝右衛門が出版人、高梨弥三郎が発売人として明治一四年（一八八一）に刊行された高畠藍泉編『近世四大家画譜』には、発売人の部分だけが大川屋の名に埋木されている版がみられる。また、福城駒太郎編『和漢読史玉篇』はもともと高梨弥三郎が明治一五年（一八八二）に出版したものであるが、後に大川屋が『新撰明治玉篇』と改題し、明治一九年（一八八六）に刊行している。このように、大川屋は発売人もしくは出版人が高梨弥三郎であった書籍の権利を後に得ている。おそらくは高梨弥三郎が何らかの理由により神戸へ移る際に、彼の持つ書籍の一部を大川屋が求版、もしくは高梨自身から譲渡されたのだと思われる。これも偏に両者が親しい間柄にあったが故であろう。

次に瀬山直次郎についてみていく。瀬山直次郎が大川屋の出版物に名をみせるのは、明治一二年（一八七九）刊の井沢保治編『対山画譜』の発売人としてである。所在地は大川屋や高梨弥三郎と同じ浅草区の蔵前片町。明治一四年時、東京書林組合に加盟していることを確認できる。瀬山直次郎は『対山画譜』や『漢画指南』初・二集など美術関係の書籍を多く手掛けているが、その本業はセドリであった。

『東京古書組合五十年史』は、当時目利きとして知られていた求古堂松崎半造の弟であり、明治一〇年代に名の知られていたセドリとして瀬山直次郎を紹介している。[26] このセドリについては、小林善八著『日本出版文化史』[27]に詳しい説明がある。

此年、警視庁は古物商取締令を発布された、その当時の書店は多く新古書を取扱つた。古本商の取締を銀座三丁目の稲田政吉が指定され取扱ふ事になり、同店にて古物商の鑑札を出した、手数料は一件弐拾銭。この古物商の取締が頗る厳重になつたので、新古書店漸次分離し専門に傾いた。古本仲買人は団体をつくる事になり、長尾文蔵、大屋房太郎等が幹事となり三十人ほどの一団となつた、この古本仲買人を「せどり」と云つた。この一団には仁義があつて下駄は履かず泥鰌草履ばきで風呂敷を背負ひ、先に店に入つた者が風呂敷を開けぬ内は、後から這入つた者は決して開けぬと云ふ習慣であつた。その店先へは腰を下さずかゞんで商ひをした、この糶取の事を俗に風呂敷と云つた。

古本仲買人の別称がセドリであること、そのセドリには団体、つまり組合があったこととその商習慣を知ることができる。また、反町茂雄氏は端的にセドリを「一般のお客は相手とせず、同業者間での売買による利鞘かせぎを主な仕事とする人々」とし、彼らが日本橋・京橋・浅草広小路の古本屋を相手に営業していたとしている。[28]

浅倉屋は古物商条例発布後、結成された仲買、つまりはセドリの

組合の幹事の一人として、瀬山直次郎の名前をあげている。[29] この組合の設立に関する文書は現代まで残されている。橋口候之介氏が紹介している文書（大屋書房纐纈公夫氏所蔵）がそれである。

古本商仲買設立

古本仲買ノ者是迄数年御店方ノ御蔭ヲ以テ渡世仕居候処、今般売買御規則厳重ノ御布告ニ付、町名番地不明ニテハ御取引ニ御疑念有之候ト存ジ、左ノ人名協議ノ上仲買同盟取結、町名番地相認メ差上置キ不都合無之様売買仕候。

一品物御買入ニ相成候節ハ必ズ御帳面ヘ目録相認メ、左ノ印章ヲ以テ証ト仕候。右品物ニ付、万一苦情有之候節ハ御報知次第、本人罷出御迷惑無之様為致可申候間、是迄通御疑念ナク御取引願上候也。

幹事
従二月至四月々番　長尾銀次郎
従五月至八月々番　横尾卯之助
従九月至十二月々番　小林米造
岩田七五郎
高木和助
瀬山直次郎

結合人名
神田五軒町　精板会社林安之助印行[30]

古物商取締令により、売買規則が厳しくなり、仲買人の所在する町名番地が不明では認められないので、長尾銀次郎・横尾卯之助・小林米造・岩田七五郎・高木和助・瀬山直次郎の六人で協議の上、仲買同盟（セドリの組合）を取り結び、その同盟に所属する者たちの町名番地を認め、不都合なく取引できるようにしたという。幹事は三期にわけて交代で当番を担っていたようで、瀬山直次郎は九月から一二月までを担当している。

このように、瀬山直次郎は美術関係の書籍を出版するだけでなく、組合の幹事を務めるほどのセドリであった。なぜセドリの瀬山直次郎と大川屋が繋がったのか、その理由は出版物からは浮かび上がってこない。だが、後述する武田伝右衛門が両者の間に介在していたのだと考えられる。

以上みてきた高梨弥三郎・瀬山直次郎の両人は、いずれも浅草区の者で、大川屋からすれば近隣にいた同業者ということになる。大川屋の当初の活動が、同じ浅草区の書籍業者によって支えられていた様子をここに認めることができよう。しかしながら、先の明治一〇年代の出版物の一覧で際立っていたのは武田伝右衛門という存在であった。次にこの人物に着目してみたい。

三、大島屋武田伝右衛門との関係をめぐって

武田伝右衛門は、屋号を「大島屋」という。文化年間から大正まで営業していた書肆であり、現時点で初代から三代目までの伝右衛門を確認できている。拙稿「「中本」受容と大島屋伝右衛門―版元、

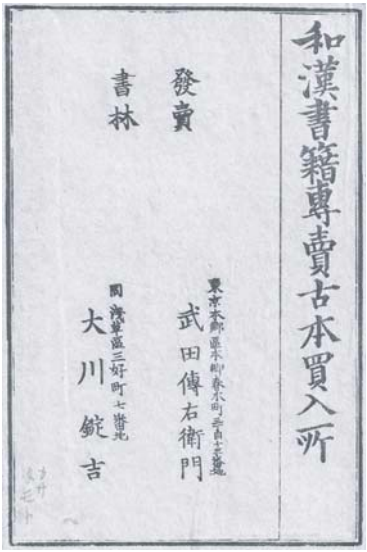
そして貸本問屋として―」より、歴代伝右衛門の略歴を次に示す。

初　代…天保の改革で処罰を受ける。安政三年没。
二　代　目…幼名「安次郎」。かつて丁子屋平兵衛方で奉公。初代の死没により、安政三年に二代目伝右衛門となる。大正九年没か。
三　代　目…通称「政吉（正吉）」。二代目伝右衛門の長子。浅倉屋久兵衛方で奉公の後、三代目伝右衛門となる。明治年間中に死没か。[31]

明治一〇年代には、二代目と三代目が存命していた。このうち、特に大川屋と関わりが深いのは、同じく浅倉屋で奉公していた経歴を持つ武田政吉こと三代目伝右衛門である。[32]

多くの書籍を共に出版している大川屋と三代目伝右衛門（以下、大島屋）だが、二〇年代以降も両者は近しい間柄にあったようである。たとえば、「明治廿四年十月廿五日印刷／仝年十月廿七日出版」の奥付を持つ求版本『風来六々部集後編』は、著作者が「武田正吉」、発行者兼印刷人が「武田伝右エ門」となっている。前者が三代目、後者がその父二代目である。なお、同様の奥付は『明治玉簾集』を改題改修した『俳諧新五百題』にもみえる。おそらく、大島屋もしくは大川屋が求版した書籍に附されたのが、この奥付なのであろう。「明治十五年八月廿八日板権免許／同廿九年十月二日求版」の奥付を持つ松岡正盛画『漢画独楽譜』が示すとおり、少なくとも明治二九年まで両者のこうした関係性は継続している。

【図4】は、架蔵する『人相独稽古』下巻に附載された広告である。こちらの広告も先ほどの奥付同様、求版された書籍に附載されたものだと考えられるが、「和漢書籍専売古本買入所」とある点が興味深い。この広告は『人相独稽古』のほかにも、次に書名をあげる書籍の後印本にもみられる。



【図4】大島屋と大川屋の広告
（架蔵『人相独稽古』下巻）

中田潛竜子編『楽焼秘嚢』（元文元年〈一七三六〉刊）
墨憨斎編『笑府』（明和五年〈一七六八〉刊）
風来山人訳『刪笑府』（安永五年〈一七七六〉刊）
皆川淇園著『老子繹解』（寛政九年〈一七九七〉刊）
池永栄春撰『訂正篆書字引』（享和二年〈一八〇二〉序）
石川雅望著『都の手ふり』（文化五年〈一八〇八〉刊）

市河米庵述『米庵墨談』正編（文化九年〈一八一二〉刊）
醉菴其成・其獨亭忍雪輯『蕪村翁文集』
（文化一三年〈一八一六〉刊）
市河米庵述『米庵墨談』続編（文政一〇年〈一八二七〉刊）
藤原貞幹著『神代宝器抄』（嘉永二年〈一八四九〉刊）
塩谷世弘著『宕陰存稿』（明治三年〈一八七〇〉刊）
郭象注『荘子南華真経』（刊年不詳）
村上五雄校『人相独稽古』（刊年不詳）
石梁撰『草字彙』（刊年不詳）

いずれも大島屋もしくは大川屋、あるいは両者が資金を出し求版した書籍なのだと思われる。前田愛氏も指摘しているように、明治三〇年の時点で大川屋は春陽堂に次ぐ出版点数を誇ったが、その大半がほかの版元から求版したものであった[33]。その求版に必要な資金は、こうした大島屋とともにまだまだ需要のある古い版を入手し、それらを販売して得た利益であったのかもしれない。先の広告にあった「和漢書籍専売古本買入所」の表記からも明らかなように、大川屋と大島屋の両者は古本業も行っていた。とりわけ、大島屋は古本業界では比較的大きな存在であった。

全国でも有数の古本屋を紹介した「明治四十一年の日本全国古本屋見立番付[34]」のなかで、大島屋は「世話方（市宿）」に位置づけられている。この「世話方（市宿）」とは、丸括弧内の「市宿」が示すとおり、当時催されていた古書の市の会主を指している。

明治期の古書市については橋口侯之介氏の解説が参考になる。

島屋の市に活気がなくなったこともあって、田中菊雄らは別に和本を扱う古書市を開設する。そのひとつが神田・青柳亭の市である。明治二十年代にはあった。田中菊雄は屋号を田菊書店といい、万延元年（一八六〇）生まれで、セドリで生計を立てていた。明治十年頃、吉川半七（現吉川弘文館）の店で月に一回定市を開くようになったときの会主となった。この市は長続きせず、その後、いくつかの市を作っては廃止するという変転を経て、伊藤福太郎、武田伝右衛門（大島屋）、土井勝吉と四人で青柳亭に市を開いたのである。これは盛んな市になった。大量の売り立てなどがあると徹夜で続けたというエピソードがあるくらいである[35]。

大島屋は青柳亭に新たな古書の市を開くとともに、その会主となったようなのである。ちなみにこの青柳亭は集会貸席であり、古本の市以外にも諸商人の寄合が行われていた場所であった[36]。

南陽堂深沢良太郎は「旧派のセドリの親方があって組合があった。田中さんは話さなかったけれども、連名帳があって皆セドリには判があって、同じやうな判をいくつも拵えてあったものです」と回想している[37]。「セドリの親方」にあたるのが、瀬山直次郎をはじめとする先ほどの六人である。連名帳は、橋口侯之介氏が紹介している三二名の一覧を指していると思われる[38]。その京橋区の項には、「武

田政吉／弥左衛門町十三番地」とある。つまり大島屋は、青柳亭で催される市を設立し、その会主となるばかりでなく、セドリの組合にも属する者であったのである。組合の一覧には、もちろん幹事を務めていた瀬山直次郎の名もみえる。ここから、大川屋と瀬山直次郎との間を取り持ったのが、自身もセドリであり、組合にも属していた大島屋であったのだと考えられる。

大島屋は瀬山直次郎との間を取り持っただけでなく、大川屋のその後の経営方針にも影響を与えていると思われる。

「全国の貸本屋や絵草子屋等が華客[39]」とされる大川屋同様、大島屋も近世後期から中本（滑稽本や人情本）を主に取り扱う貸本問屋であった。同じく浅倉屋で奉公したのみならず、その後も共に書籍を出版・求版していた大島屋に、大川屋が影響を受けたとしても不思議ではない。つまり、自身の貸本屋としての経験、そして身近な大島屋の影響によって、大川屋は貸本問屋としての道を歩み始めたのだと考えられるのである。

大正二年（一九一三）刊の石井研堂著『独立自営営業開始案内』第二編では、貸本に供する東京出来の講談本の仕入れ先として、大川屋が筆頭にあげられている。明治末年から大正にかけての時代において、大川屋は東京を代表する貸本問屋へと成長を遂げているのである。こうした躍進の要因の一つが、長らく書籍の出版・取次・販売と並行して続けられていた貸本業であったことはすでに述べた。だが、身近に大島屋という存在がなければ、そもそも大川屋は貸本問屋になっていなかったかもしれない。大島屋がいたからこそ、大川屋は貸本問屋としての道を歩み、やがては「斯界の巨頭と仰がれ巨万の資産を興」す活躍ができたのである。

おわりに

初代大川屋錠吉にとっての黎明期は、貸本業に勤しみながら、同じ浅草区の書肆高梨弥三郎や瀬山直次郎、同門の三代目大島屋伝右衛門と協力し合い、力を蓄えていた時期であったといえる。後の成功は、この時期を経なければあり得なかった。明治二八年頃まで続けられた貸本業と、三代目伝右衛門との関係および彼から受けた影響の大きさは計り知れない。

前述のとおり、明治三〇年代以降の貸本屋には、もう近世の面影は残されていない。しかしながら、彼ら貸本屋の営業は大川屋という近世的な土壌の中で生まれ、成長した書肆によって支えられていたのである。

これまで詳らかにされてこなかった、初代大川屋錠吉の実態をいくらか描きだすことができたものの、その売捌書肆としての一面や、具体的な流通網など、まだまだ不明瞭な部分は残されている。これらについては、いずれ別稿で述べたい。

注

（1）拙稿「誠光堂池田屋清吉の片影―文書からみる明治期貸本屋の営業と生活―」（『中央大学国文』六〇号、中央大学国文学会、二〇一七年一月）。

（2）浅岡邦雄・鈴木貞美編『明治期「新式貸本屋」目録の研究』（作品社、二〇一〇年）および浅岡邦雄「明治期大阪の貸本目録―『学術小説貸本

目録』をめぐって―」（『書籍文化史』二、二〇〇一年一月）。

（3）藤島隆著『貸本屋独立社とその系譜』（北海道出版企画センター、二〇一〇年）。

（4）浅岡邦雄「明治期貸本貸出台帳のなかの読者たち―烏山町越雲巳之次『貸本人名帳』をめぐって―」（『日本出版史料―制度・実態・人―』四、日本エディタースクール出版部、一九九九年三月）。

（5）拙稿「近代金沢における書籍受容と春田書店」（『中央大学国文』六三号、中央大学国文学会、二〇二〇年三月）。

（6）貸本問屋および大島屋伝右衛門については拙稿「「中本」受容と大島屋伝右衛門―版元、そして貸本問屋として―」（『近世文藝』一〇九号、日本近世文学会、二〇一九年一月）で詳述した。

（7）前田愛「明治初期戯作出版の動向―近世出版機構の解体―」（『前田愛著作集第二巻　近代読者の成立』筑摩書房、一九八九年所収。初出は一九六三・六四年）。

（8）柴野京子「赤本の近代」（『書棚と平台―出版流通というメディア』弘文堂、二〇〇九年所収。初出は二〇〇七年）。

（9）東京書籍商組合編『東京書籍商組合史及組合員概歴』（東京書籍商組合、一九一二年）。一一二頁。

（10）講談社、一九六四年。三二～三三頁。

（11）全国出版物卸商業協同組合、一九八一年。三二～三三頁および三七頁。

（12）小川菊松著『出版興亡五十年』（誠文堂新光社、一九五三年）一八四～一八七頁。

（13）『回顧五十年　藤井誠治郎遺稿』（藤井誠治郎遺稿刊行会、一九六二年）一三〇～一三二頁。

（14）大川義雄「「大川文庫」三〇〇点の歴史」（尾崎秀樹・宗武朝子編『日本の書店百年』青英舎、一九九一年所収）。

（15）前田・柴野両氏は特に注記していないものの、大川屋の経歴に関する記述は明らかに『概歴』を踏まえている。

（16）たとえば、稲岡勝監修『出版文化人物事典』（日外アソシエーツ、二〇一三年）など。

（17）浅倉屋の創業年および八代目久兵衛については浅倉屋吉田久兵衛「和本屋生活半世紀の思い出」（反町茂雄編『紙魚の昔がたり　明治大正篇』八木書店、一九九〇年所収）を参照。

（18）坪内逍遙著『少年時に観た歌舞伎の追憶』（日本演芸合資会社出版部、一九二〇年）一〇七頁。

（19）「紙魚の跡　貸本屋の巻（一）」（『読売新聞』一八四九〇号、一九二八年八月二一日）。

（20）鈴木圭一「明治期二題」（『書籍文化史』二、二〇〇一年一月）。

（21）注（14）前掲書のなかで「その貸本屋というのは昔ながらの運びの貸本屋ですか、それとも店を開いた形で」という問いに対し、甥の大川義雄は「運びらしいです」と答えている。

（22）沓掛伊左吉「貸本屋の歴史」（『沓掛伊左吉著作集―書物文化史考―』八潮書店、一九八二年所収。初出は一九七一年）。

（23）弥吉光長「明治初年の出版団体（その一）―書物問屋仲間から東京書籍出版営業者組合へ―」（『弥吉光長著作集四　明治時代の出版と人』日外アソシエーツ、一九八二年所収。初出は一九五三年）を参照。なお、表記は「高梨孫三郎」となっている。以下、東京書林組合および東京地本錦絵営業者組合の加入者については本稿を参照。

（24）注（13）前掲書二二頁に「小川氏（筆者注　小川菊松）の次に至誠堂から独立し『主婦之友』の創刊当時一手扱いをやった、止善堂原猛君が、失敗して神戸落ちした時」とある。

（25）出版タイムス社編『日本出版大観』（出版タイムス社、一九三一年）の大阪盛文館支店の項に「大正十四年閉店した高梨熊太郎氏経営の店舗を買収し開設された」とある。

（26）『東京古書組合五十年史』（東京都古書籍商業協同組合、一九七四年）五頁。

（27）日本出版文化史刊行会、一九三八年。八八五頁。

（28）反町茂雄著『蒐書家・業界・業界人』（八木書店、一九八四年）二三五

頁。

(29) 注（17）前掲書に「古物商条例発布後、仲買の人達が申し合わせ、残らず同じ小判形の印章に苗字を入れて、品物取引の時はこれを判取帳へ押す事になりました。この時には結合の人名三十二人、幹事が長尾銀次郎さん・横尾卯之助さん・小林米蔵さん・岩田七五郎さん・高木和助さん・瀬山直次郎さんの六人でした」とある。

(30) 橋口侯之介著『江戸の古本屋』（平凡社、二〇一八年）三一三頁。

(31) 注（6）前掲論文。

(32) 大川屋は大島屋が製剤・販売していた売薬「処女香」の売弘所であった可能性がある。これも両者の関わりの深さを示す一例といえよう。なお、処女香については拙稿「大島屋伝右衛門と池田屋一統―売薬「処女香」を端緒として―」（『出版研究』五〇号、日本出版学会、二〇二〇年三月）を参照のこと。

(33) 注（7）前掲論文。

(34)『古本屋』五号（荒木伊兵衛書店、一九二八年五月）所収。この番付は、もともと『其中堂書売書目』二七号の附録である。しかしながら、現在目録そのものの所在を確認することはできていない。

(35) 注（30）前掲書。三一九頁。

(36) 金子春夢編『東京新繁昌記』（東京新繁昌記発行所、一八九七年）では貸席として「○青柳、○福田屋、○相模屋」の三つをあげ、「共に集会貸席にて、外神田仲町大時計の前にあり、書生、商人の寄合多し、席料一日六十銭以上」と解説している。

(37) 南陽堂深沢良太郎「明治大正期のセドリについて　その二、洋本屋の巻」（反町茂雄編『紙魚の昔がたり　明治大正篇』八木書店、一九九〇年所収）。

(38) 注（30）前掲書。三一四頁。

(39) 注（12）前掲書。一八四頁。

【附記】

本稿は第一二回十九世紀文学研究会（於法政大学）での口頭発表に基づいています。また、科学研究費補助金（特別研究員奨励費　課題番号：18J20862）による成果の一部です。

（中央大学大学院文学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員）